

企業存続と建設産業の未来をつなぐ選択 新型コロナウイルスとの戦いで勝利を

空条 円
Madoka Kujo

生物のそれぞれの種は、単純な

原始生物から環境に適応しながらいくつかの個体(最適者)の自然選択(淘汰)を経て進化してきたとする学説「種の起源」。十九世紀後半にダーウィンが唱えたことで知られる生物の進化論には、様々な事実や新たな視点などが加わり、自然淘汰説に突然変異、遺伝子の機会的浮動、隔離などの要因を加えた総合説が現在の主流のようだ。

急な環境変化に順応・適応できるかが、種の存続を左右することに間違いはないだろう。かつて地球上で繁栄した恐竜はその代表例であり、およそ六、六〇〇万年前に忽然

と姿を消した。

恐竜絶滅の原因については様々な仮説がある。現在の通説は隕石衝突説。巨大な隕石の衝突によって多量のガスや粉じんが飛散し、何年間も成層圏を漂い太陽光を遮った結果、寒冷化現象を起こした。その結果、植物は光合成を行えず死滅し、食物連鎖の頂点に立っていた恐竜も死に至ったというストーリーだ。

一九九一年、メキシコのユカタン半島付近に直径約二〇〇キロのクレーターが発見され、衝突時期も恐竜の絶滅時期と重なることから、説の信憑性を裏付けるものになった。

現在の地球上では、環境変化への

適応力が高かった哺乳類の中でも、飛躍的に知的進化を遂げ、高度な文明社会を創出した人類が席巻している。その人類もいまは目に見えない微細なウイルスとの戦いにより、各地で混乱が広がる。中国発の新型コロナウイルス感染症は世界中に急速に拡散し、社会・経済への影響も広がり続けている。

人類は戦後最大の危機に

人類を脅かす感染症の世界的な大流行を指すパンデミック。原因が解明されず、治療方法も十分

に確立されていない感染症のパン

デミックは過去に何度も発生し、世界を恐怖に陥れてきた。対処方法を確立しても病原体の耐性が強まったり、新たな病原体が発生したりと、感染症との戦いは延々と続く。

感染症と長年戦ってきた人類が唯一根絶したのが天然痘。紀元前のエジプトのミイラに感染した痕跡が見られ、日本でも六世紀から周期的に流行を繰り返す。二十世紀に入って世界規模でワクチンの接種が進み、一九八〇年にWHOが根絶を宣言している。

世界中で猛威を振るう新型コロ

ナウイルスも、長い戦いの歴史の一幕に過ぎないとも言える。しかし、人口密度が上がり、交通輸送ネットワークが高度に発達した現代社会では感染症の根絶はもろろん、流行を抑えることがこれまで以上に難しくなっている。

世界中の為政者や企業のトップらは「人類にとって戦後最大の危機」と警鐘を鳴らすほど、今回の新型コロナウイルスとの戦いを厳しいものと認識している。外出禁止や都市封鎖といった強硬な隔離政策を打ち出し、感染拡大の収束を目指す地域もある。

今夏に開催を予定していた東京五輪・パラリンピックの延期が発表された三月二十四日以降、重しが取れたかのように国内でも感染拡大の防止に向けた対応が一段と加速する。四月七日には政府が緊急事態宣言を発出し、感染者が急増する七都府県を対象に人々の行動や企業活動の自制を強く求めた。建

設会社も管理部門を中心に在宅勤務を強化するとともに、発注者側と協議しながら現場を一時閉鎖しようとする動きが強まった。

事後対応でリスク膨らむ

緊急事態宣言と同時に、政府は過去最大の事業規模一〇八兆円超の緊急経済対策を閣議決定した。新型コロナウイルス感染症の拡大防止策や医療提供体制の整備、雇用の維持と事業継続に向けた金融支援などに注力する一方、感染症拡大の収束後を見据えた経済活動の回復策を盛り込んだ。二〇二〇年度補正予算で緊急の対策を実施。公共事業で抜本的な生産性向上を推進するとともに、一九年度補正予算と二〇年度当初予算の早期執行を図り、景気の下支えに万全を期す構えだ。

感染者数が急増する東京都は政府の緊急事態宣言を受け、宣言に

基づく都内の緊急事態措置が解除されるまで、工事や設計等委託、物品買入れなどの発注公告を原則取りやめることを決めた。感染症対策やライフライン、緊急対応などのやむを得ないと判断した事案を除き、新たな案件の入札公告などは行わないという。

建設業界の対応については工事の一時中断といった基本方針を打ち出す企業も見られるが、発注者からの要請がない限り工事を継続するというスタンスの企業も目立つ。

感染拡大防止を目的に工事を中断した場合、追加経費などの請求が認められるかどうかは発注者によって対応が分かれる。日給月給の職人の休業補償なども含めて課題は多い。労働集約型で重層化した請負業である建設産業では、工事中断による影響は受発注者だけでなく、人々の暮らしや地域の経済・社会に想像以上に広がる可能性もある。元請側も自社だけでなく、協力

会社の経営や職人の生活のことなどを考えると、簡単には工事中断の判断を下せないのは当然だろう。しかし、多様な業種の人たちが作業所という一つの空間に大勢集まることによる感染リスクも見過ごせない。無症状の感染者が複数の現場に出入りしていれば、あちこちにクラスター(感染者集団)を発生させることになる。隔離して経過観察となる濃厚接触者も無数に増え、閉所される現場も広範になることが予想される。

感染者が発生してからの事後対応では、感染拡大を抑え込む労力とコストも事前対応より膨らむことになる。結果として建設業に従事する人たちの命と暮らしに重大な影響を及ぼしかねない。直面する危機を乗り越えるために業界が一丸となり、新型コロナウイルスとの戦いを最優先に考えることが、企業の存続と建設産業の未来をつなぐための最善の選択と思われる。